

(お知らせ)  
第3回「生物多様性国家戦略懇談会」の議事要旨について

平成13年5月22日(火)  
自然環境局自然環境計画課  
課長 小野寺 浩(内線 6430)  
企画官 渡辺 綱男(内線 6490)  
補佐 植田 明浩(内線 6480)

「生物多様性国家戦略懇談会」第3回会合の議事要旨をお知らせします。

- 1 懇談会の概要(出席者及び傍聴者約70名-環境省、各省、NGO、マスコミ等)  
平成7年10月に策定した生物多様性国家戦略の見直しに向けて開催した第3回「生物多様性国家戦略懇談会」の議事要旨(速報)を別添のとおり取りまとめましたので、お知らせします。

今回は、全国的な自然環境データの整備について、自然環境保全基礎調査を中心に議論を行うとともに、二次林など里山についての議論がなされました。

(1) 生物多様性国家戦略懇談会出席者

浅野直人 福岡大学法学部長  
大島康行 (財)自然環境研究センター理事長  
小野勇一 北九州市立自然史博物館館長  
篠原修 東京大学工学系研究科教授  
星野進保 総合研究開発機構特別研究員  
鷲谷いづみ 東京大学農学生命科学研究科教授

<ゲストコメンター>

系賀 黎 長野県自然保護研究所総括研究員

(2) 第3回懇談会開催経緯

日時：平成13年5月21日(月) 13:30~16:30

場所：東京會館「シルバースタールーム」  
東京都千代田区霞が関3-2-5霞ヶ関ビル35F

2 議事要旨等の公開

議事要旨、懇談会資料等は、環境省生物多様性センターHP  
(<http://www.biodic.go.jp/nbsap.html>)でもご覧いただけます。

3 次回懇談会 6月25日(月)午後開催予定

- (参考)・平成13年3月5日第1回懇談会(生物多様性十年史等)  
平成13年4月10日第2回懇談会(国立公園と野生生物等)  
・懇談会は、夏までに6回程度開催する予定。

(別添)

#### 自然環境保全基礎調査について

第1回調査は、手探りの中で「植生自然度(植生から人為の影響の度合いを評価)」「すぐれた自然(重要な自然の抽出)」「環境寄与度(植生現存量等の算出)」の3つのキーワードにより目的を明確にして実施した。植生自然度は10、9にだけ注目するのではなく、自然度区分に応じた保全・修復の方針を考えていくために示した。環境寄与度調査は、30年間の研究・技術の進展を活かして再構築してみてもどうか。自然環境に関する「総合的な調査」という面から、世界的に見ても基礎調査の30年の蓄積は評価できる。今後は政策への活用も考え、継続するもの、新規に行うものなど調査項目にメリハリを付けることが必要。

調査の目的には、「リサーチ(自然環境の基礎的研究的把握)」と「ポリシー(政策決定への活用)」とがある。「ポリシー」では調査の焦点を絞ることが重要である。継続的に調査をやっているといわゆる「調査疲れ」が問題となる。調査をすることのみで終わっては意味がなく、政策や計画に活かすことが重要である。

生物多様性分析のためには、国民所得統計のような分析のフレームワークが必要。国民は、「自然との共生」の重要性に目が向いており、自然が豊かさの根源であると認識している。

国レベルで整備すべきデータと地方レベルで整備すべきデータの仕分けをし、地方を巻き込んでいくことが必要ではないか。

種毎の保全計画策定のためには、分布情報だけでなく、種の生息生育環境などの情報も必要となる。

アセスメント調査による地域的な詳細データを、基礎調査のデータと連携して活用できるような仕組みをつくるべき。

#### 里山の分析について

二次林と農耕地、草地、ため池等がモザイク状に配置された地域を全体としてみる視点が必要。

里山は、生物資源採取の場として利用され、適度な攪乱を受けることによって、生物の多様性が保たれてきた地域である。

里山の生物資源をバイオマスエネルギーなど新しい形で利活用する動きもある。

里山の重要性をどのようにアピールするかがポイント。森林や農地の管理の担い手不足の問題や、人がいなくなると景観的にも汚くなるという問題を踏まえ、運動論的なアプローチや社会学的調査が必要。

二次林・里山は、大きくはアカマツ林、コナラ林、ミズナラ林といった3つ程度の植生区分に分けられる。その中でも、意図的に維持されてきたアカマツ林やコナラ林とそうではないミズナラ林とは大きく性格が異なる。

流域の水循環の問題は、新環境基本計画でも十分に書ききれていない。本来は、里山など自然環境全体との関係を含めて考えていくべき。

人の手が入らなくなり二次林の遷移が進行することをどう評価するか、自然的社会的条件を総合した評価の枠組みが必要。

里山の問題は、生物だけでなく地域の生活や文化とも関わる総合的な問題であり、長野県では県政の重要な課題の一つとして、今後、地域の視点から里山の評価を総合的に進めていく予定。

(以上、6名の委員及び1名のコメンター発言：順不同 文責：事務局)